

平安・鎌倉時代に於ける「念ス」の意味・用法

——「オモフ」と比較して——

柚 木 靖 史

はじめに

従来の漢語サ変動詞を対象とした研究を、私に分類し整理すると次のようになる。

(1) 和文資料・和漢混淆文資料を対象とした研究

(2) 全ての漢語サ変動詞を対象にして、文献の特徴を述べた研究や、個々の漢語サ変動詞を対象にして、その意味・用法を述べた研究等が存する。

(3) 訓点資料を対象とした研究

漢文訓読語研究の中に、漢語サ変動詞について触れられた著書や、漢文訓読史研究の中に、漢語サ変動詞について触れられた著書等が存する。

このうち、特に(1)には、類義の和語動詞との比較による漢語サ変動詞の意味・用法についての研究が含まれるが、いずれも和文資料及び和漢混淆文資料のみを対象とするか或いはそれに重きをおいた研究であって、限られた文章ジャンルを対象としている所に問題点が存すると考えられる。そこで本稿では、訓点資料・和文資料・和漢混淆文資料を対象として、漢語サ変動詞の意味・用法について述

べることとする。ここで取り上げる「念ス」は、訓点資料・和文資料・和漢混淆文資料のいずれの資料群にも多くの用例が認められることから、それぞれの資料に於ける意味・用法を比較する上で有効な語であると考えられる。また、「オモフ」も、観智院本類聚名義抄や前田本色葉字類抄に於いて、「念」字に対してこの訓が掲載されており、また、実際に訓点資料に於いても「念」字に対して「オモフ」と読んだ例が多く認められることから、「念ス」と「オモフ」を比較することは、意味・用法を考える上で有効であり、加えて、異なる文章ジャンルに於ける意味・用法を比較し得る組み合わせであると考えられる。

一、訓点資料に於ける「念ス」「オモフ」

(1) 「念ス」「オモフ」の出現状況

平安・鎌倉時代に加えられた訓点資料を仏典及び仏教関係資料（注釈書等）と漢籍とに分けて、「念ス」「オモフ」それぞれの用例数を示すと、表1・表2の如くなる。表1に示す様に、仏典及び仏教関係資料では、平安時代・鎌倉時代を通じて「念ス」「オモフ」が認められるのに対して、表2に示す様に漢籍では、「オモフ」

(表1)

のみで、「念ス」は認められない。また、仏典及び仏教関係資料には、西大寺本金光明最勝王經古點の様に、同一資料中に「念ス」「オモフ」の二訓が認められる資料が存する。このような結果になる原因

① 仏典及び仏教関係資料

としては、「念ス」と「オモフ」との間に、意味・用法の差異が存在しているからであろうと予想される。そこで、まず「念ス」「オモフ」の意味・用法について考察することとする。

		資 料		加 点 時 期		念ス		オモフ				
平 安 後 期	天理図書館蔵南海寄帰内法傳 高野山龍光院蔵妙法蓮華經 法華義疏長保四年點 東寺蔵不動儀軌 地藏十輪經康平三年點 大東急記念文庫蔵大日經義釈 高山寺蔵大毗盧遮那成佛經疏	平安後期 平安後期 長保四(一〇〇二) 万寿二(一〇二五) 康平三(一〇六〇) 承保二(一〇七五) 永保二(一〇八二) 長治元(一一〇四)	1 4 1 1 1 3 6 1	3 19 4 0 0 1 1 2	石山寺蔵佛說太子須陀拏經 石山寺蔵沙彌十戒威儀經 東大寺図書館蔵百法顯幽抄 法華經文讚淳祐古點	平安中期 平安中期 平安中期 (九五〇)頃	1 2 0 0	1 1 3 2	唐招提寺本金光明最勝王經 山田本妙法蓮華經古點 聖語蔵願經四分律 西大寺本金光明最勝王經 東大寺圖書館蔵金光明最勝王經註釈 東大寺図書館蔵成実論(卷二十二) 正倉院本地蔵十輪經	平安極初期 平安極初期 平安極初期 平安初期 平安初期 天長五(八二八) 元慶七(八八三)	7 16 2 7 0 1 1	2 3 0 1 1 1 0

(表2)

②漢籍

鎌倉時代	院政期	鎌倉時代	院政期	念ス	オモフ
倭點法華經 仁和寺藏後鳥羽天皇御作無常講式 浄土論註	立本寺本妙法蓮華經 興福寺藏大慈恩寺三藏法師傳古點 〃 広島大学藏八字文殊儀軌 大唐西城記長寛元年點 西教寺本秘藏宝繪	寛治元(一〇八七) 承德三(一一〇九) 承久四(一一一六) 永歴二(一一六一) 長寛元(一一六三) 院政期末	寛治元(一一一三) 承久元(一一一九) 寛喜三(一二三一) 貞永元(一二三二) 嘉禎二(一二三六) 建長五(正嘉元)(一二五三) 〃(一二五七) 〃(一二七〇)頃 嘉元元(一二〇三) 室町(鎌倉時代の訓点を反映)	1 2 24	0 0 16
資	料	加	点	時	期
神田本白氏文集卷三・卷四 金沢文庫藏白氏文集 〃 〃 〃 金沢文庫本群書治要(卷一~十) 文永本論語 高山寺本論語 書陵部藏文選					

(2)「念ス」「オモフ」の意味・用法
この項では、「念ス」「オモフ」の対象を分類し整理することに拠

り、それぞれの語の意味・用法を考えることとする。但し、ここでいう対象には、「仏ヲ念ス」の如く文中に示されたものと、文脈の

(表3)

資料	信仰の対象	仏教に関する事
山田本妙法蓮華經 西大寺本金光明最勝王經 東大寺図書館蔵金光明最勝王經註釈 東大寺図書館蔵成実論(卷二十二) 正倉院本地蔵十輪經 東大寺図書館蔵百法頤函抄 法華經玄讚淳祐古點 天理図書館蔵南海寄歸内法傳 高野山竜光院蔵妙法蓮華經 法華發疏長保四年點 地蔵十輪經康平三年點 高山寺蔵大毗盧遮那成佛經疏 立本寺本妙法蓮華經 広島大学蔵八字文殊儀軌	仏(1) 大慈尊(1) 仏(1) 仏(4) 阿弥陀仏(1) 仏(1)・観音(1) 仏(1)	過去(1)・無量無數劫(1) 諸善業(1)・四法(1) 息の長短(1) 息の身に逼ると諸の身行を除すと(1) 是の事(1)・相(1) 伽他(1)・偈(1) 空と天相と无作(1) 世俗の事(1) 教を興す事(1) 利他(1) 大乘(2)・不誓(1) 佛大覚の身の力、無畏に成さるる事(1) 真言(2)・密(2) 内眷(1)

△仏典及び仏教関係資料▽

○念ス

意味を考えて私に設定したものが存する。個々の用例について、対象を分類すると、「信仰の対象」「仏教に関する事」「仏教に関係しない事」の三類に分類することができようかと思う。ここで、この三類について注しておくことと次の様になる。

- ①信仰の対象―「仏」「観音」の如き、信仰の直接の対象と考えられる語句
- ②仏教に関する事―「過去」「善業」の如き、仏典の教義と深く関わる概念を示していると考えられる語句
- ③仏教に関係しない事―「音楽」「父」「子」の如き、仏典の教義とは直接には関わらないと考えられる語句

浄土論註
無常講式

仏(1)
仏(1)

(対象は、文中にヲ格として示された例のみを掲げた。以下表4・表5も同様である)
〔漢籍に「念ス」の用例なし〕

○オモフ

△仏典及び仏教関係資料▽

(表4)

資料	料	仏教に関する事	仏教に関係しない事
西大寺本金光明最勝王經 東大寺図書館蔵成実論(卷三十二) 法華經玄讚淳祐古點 大東急記念文庫蔵大日經義釈 高山寺蔵大毗盧遮那成佛經疏		願(1) 利徳(1) 教を興す事(1) 報せんと欲ふ事(2) 利他(2) 悉地(1)・恩徳(1) 世仙の事(1)・菩提心(1) 法利を求むる事(1) 劫(2)・方便の力(1) 世俗の事(1) 毀懐(1)・徳(1) 劫(2)・方便の力(1)	楽の事(1) 子(1)・父(1) 貧しき事(1)
立本寺本妙法蓮華經 興福寺蔵大慈恩寺三蔵法師傳 倭點法華經			

△漢籍▽

(表5)

資料	料	仏教に関係しない事
神田本白氏文集 金沢文庫蔵白氏文集	寒僞(2)・女工の勞しき事(2)・楊姫 (1) 女工の勞しき事(2)・寒僞(1)	
高山寺本論語 書陵部蔵文選	耕さむ事(2)・忠信(1) 古(2)・夫子(1)・出宿(1)・飢(1)・無 衣客(1)・婦旋(1)・山澤居(1)・旧思 (1)・老母(1)・子(1)・君(1)	

表3・表4・表5は、仏典及び仏教関係資料と漢籍に於ける「念ス」「オモフ」について、対象となる語句を具体的に示したものである。これらの表から導き出される事柄をまとめると次の様になる。

(1) 仏典及び仏教関係資料では、表3の如く、「念ス」の対象として、「信仰の対象」「仏教に関する事」が認められ、表4の如く、「オモフ」の対象として「仏教に関する事」「仏教に関係しない事」が認められる。一方、漢籍では、「念ス」は用例そのものが認められず、表5の如く、「オモフ」の対象として「仏教に関係しない事」のみが認められる。

(2) 「信仰の対象」は、仏典及び仏教関係資料のみに認められ、全て「念ス」と読まれる。

(3) 「仏教に関係しない事」は、漢籍のみに認められ、全て「オモフ」と読まれる。

(4) 「仏教に関する事」は、仏典及び仏教関係資料と漢籍とに認められ、「念ス」と読まれる場合と、「オモフ」と読まれる場合とが存する。

また、個々の用例の対象については、A全て「念ス」と読まれる語句・B全て「オモフ」と読まれる語句・C「念ス」と読まれる場合と「オモフ」と読まれる場合とが存する語句が存する。以下、その具体例を掲げる。

A全て「念ス」で読まれる語句(仏)

① 深(念)心ヲ以テ仏ヲ念^テたてまつり淨戒ヲ修^テ持セン故ニ(山田本妙法蓮華經方便品⑥15) 「訓点語と訓点資料 第七輯」

② 深(念)心を以(テ) 佛を念し、淨戒を修持(スル)が故(ニ) (竜

光院本妙法蓮華經方便品⑥15) 「訓点資料の研究」

③ 深(念)心を以て佛を念し、淨(一)戒を修持するが故に(立本寺本妙法蓮華經方便品 20上11) 「訓点語と訓点資料 別刊第四輯」

B全て「オモフ」で読まれる語句(女工の労はしき)
④ 繅(一)綾は女工ノ「之」^{イダ} 勞ハシキを念ヘリ「也」(神田本白氏文集 卷三21行)

⑤ 繅(一)綾・女工ノ「之」^{イダ} 勞フシキヲ念ヘリ「也」(金沢文庫 本白氏文集卷三)

⑥ 繅(一)綾・女工ノ「之」^{イダ} 勞ハシキヲ念フ「也」(同右 嘉禎二年 加点本 卷三)

C「念ス」と読まれる場合と「オモフ」と読まれる場合とが存する語句(利他・世俗の事)

(利他)

⑦ 常に利他を念(「スル」) (セ)む(ヲ) 見てはとイフハ「者」(高山寺藏 大毗盧遮那成佛經疏永保點 卷三 518行)

⑧ 故に常に利他を念ふ「之」性・有(ヲ)む(同右 卷三 610行) (世俗の事)

⑨ 常(「セ」)世俗の事を念せむ(竜光院本妙法蓮華經 卷五 15) (常ニ世俗ノ事ヲ念ニヒ(倭點法華經 卷五 159行))

このように、「信仰の対象」の場合は「念ス」と読み、「仏教に関係しない事」の場合は「オモフ」と読むといった事実が認められ、その中で特に先のA Bの用例に示した語句では、常に同じ読みが成されるといった事実から、加点者は、対象となる語句によって、「念ス」と「オモフ」の二訓のいずれかを選択したものと考えられるの

である。つまり、訓点資料に於ける「念ス」「オモフ」には、意味・用法の差異が存すると考えられるのである。但し、先にCの用例に示したように、同一対象であるにも関わらず、「念ス」「オモフ」の二訓が認められる場合も存する。これは、何故であろうか。Cの用例⑦⑧の高山寺藏大毗盧遮那成佛經疏では、永保二年（一〇八二）の訓点では「オモフ」と読み、長治元年（一一〇四）の訓点では「念ス」と読んでいる。また、Cの用例⑨⑩の妙法蓮華經では、平安時代後期・中院僧正点の訓点である竜光院本では「オモフ」と読み、鎌倉時代の訓点である倭点本では「念ス」と読んでいる。つまり、「仏教に関係しない事」の対象のうち、同一語句であるにも関わらず「念ス」と「オモフ」の二訓が存する場合には、訓点に時代差や訓点の系統の差異が認められるのである。このような例は、他にも認められる。

④第二の一偈は教を興（さ）むと欲^{オモ}フトイフコトヲ念^フスル
コトヲイフ（法華義疏長保四年點方便品末 177行）

△朱筆で「念ス」とあるのに対して、別訓で「念フ」が存する▽

②心に念ヒロに演ルこと（立本寺本妙法蓮華經 卷一 72上・10）

③心ニ念シロニ演ルコト（倭点法華經 卷一 73行）

△院政時代（寛治元年）・喜多院点の訓点である立本寺本では「念フ」であり、鎌倉時代の訓点の倭点本では「念ス」である▽

以上の事から、訓点資料に於ける「念ス」と「オモフ」は、意味・用法に差異が存し、対象に拠って読み分けられていると考えられる。但し、訓点の時代差や系統に拠って、同一対象であるにも関わ

(表6)

平 安 時 代											資 料		資 料										
											念ス		念ス										
竹取物語	伊勢物語	大和物語	落窪物語	宇津保物語	和泉式部物語	蜻蛉日記	枕草子	源氏物語	紫式部日記	榮華物語	夜の寝覚	浜松中納言物語	1	2	2	8	1	18	11	11	18	26	
鎌 倉 時 代											資 料		資 料										
											念ス		念ス										
狭衣物語	更級日記	讚岐侍典日記	堤中納言物語	在明の別れ	とりかへばや物語	あさちが露	たまきはる	風につれなき物語	いはずのぶ	石清水物語	あきぎり	竹むきが記	18	9	5	2	6	7	3	1	4	2	12

らず、異なる読みがなされる場合が存する。それでは、「念ス」と「オモフ」の意味の差とは如何なるものであろうか。次の項では、和文資料・和漢混淆文資料で使用された用例に基づいて、「念ス」と「オモフ」の意味・用法を考えることとする。

二、和文資料・和漢混淆文資料に於ける「念ス」「オモフ」

(1)「念ス」の出現状況

資料別に、「念ス」の用例数を示した表が、表6・表7・表8である。この表からも解るように、「念ス」は、平安時代・鎌倉時代を通じて、その使用例が認められる語である。

①和文資料

②和漢混淆文資料

(表7)

代時安平		代時倉鎌		料		念ス
打聞集	今昔物語集	古本説話集	高野山西南院蔵往生要集	高野山西南院蔵三宝絵詞	名古屋市博物館蔵三宝絵詞	(東大寺切)
方丈記	菟心集	最明寺本宝物集	閑居友	足利本仮名書き法華経	宇治拾遺物語	高山寺明恵上人行状
八幡宮巡拝記	十訓抄	沙石集(元応本)	〃 (日本古典文学大系)			
1	179	13	9	7	2	念ス

(表8)

(参考) 親鸞聖人真蹟資料

高山別院蔵唯信抄断簡	承久三(一二二一)
唯信抄	寛喜三(一二三三)
唯信抄専修寺ひらがな本	文暦二(一二三五)
三帖和讃	建長七(一二五五)
専号真像銘文(略本)	建長七(一二五五)
	2 4 6 9 1

西方指南抄

一念多念文意	康元二(一二五六)	22
唯信抄文意専修寺正月十一日本	康元二(一二五七)	3
尊号真像銘文(広本)	正嘉二(一二五八)	1
顕浄土真実行文類	弘安六(一二八三)	8 25

②「念ス」「オモフ」の意味・用法

この項では、先に訓点資料を対象として行なったのと同様の方法で、まず、「念ス」「オモフ」の対象を整理し分類することに抛り、それぞれの語の意味・用法を考へることとする。

①「念ス」の意味・用法

表9・表10・表11は、和文資料と和漢混淆文資料について、「念ス」の対象を具体的に示したものである。個々の用例について対象を分類すると、訓点資料の場合と同様に、「信仰の対象」「仏教に関する事」「仏教に関係しない事」の三類に分類することができる。表9～11からも解るように、この三類は、和文資料と和漢混淆文資料の両方に共通して認められる。但し、「仏教に関係しない事」を対象にとる例は、和文資料の方が、和漢混淆文資料よりも多い。また、和文資料・和漢混淆文資料に於いて、「念ス」が「仏教に関係しない事」を対象として取ること、訓点資料と異なる点である。

(表9)

①和文資料
△「念ス」の対象▽

資	料	信仰の対象	仏教に関する事	仏教に関係しない事
宇津保物語		阿弥陀(1)	陀羅尼(2) 観音の本誓(1)	女の命(1) 次々に生い出で給ふ(1) 勝たむ事(1) 是の事(1)・涙(1) 涙こぼれさせ給ふ(1)
和泉式部日記		仏(1)		苦しき(1)
蜻蛉日記		仏(2)		ねぶたき(1)
枕草子		仏(10)・仏神(3)		耐えがたき(2)
源氏物語		観音(1)		をかしき(2)
紫式部日記		仏(1)	御祈りども(1)	心地いと苦しき(1)
夜の寝覚		仏神(1)		笑みたまふべき(1)
浜松中納言物語		仏(8)・仏神(1)		涙ぐまれぬべき(1)
狭衣物語		神仏(2)・仏(1)	神の御しるし(1)	涙こぼれぬべき(1)
更級日記		天照大神(2)	空の光(1)	耐えがたき(1)
あまのかるも		仏(1)	神の御心(1)	苦しからむ(1)
在明の別れ		仏(2)		心地の苦しき(1)

(表10)

②和漢混淆文資料

(対象は、文中にヲ格として示された例のみ掲げた。以下表10・表11も同様である。)

資料	料	信仰の対象	仏教に関する事	仏教に関係しない事
風につれなき物語 石清水物語 観智院本三宝絵詞 高野山西南院蔵往生要集 古本説話集 今昔物語集 方丈記 最明寺本宝物集 閑居友 足利本仮名書き法華經 宇治拾遺物語 高山寺明恵上人行状 八幡宮巡拜記 十訓抄 八幡宮縁起 沙石集(日本古典文学大系)	仏神(1) 仏(1)	仏(6) 仏(3) 仏(8)・観音(2) 地藏(1)・菩薩(3) 不動尊(2) 毘沙門天(2) 吉祥天女(1) 如来(1) 釈尊の父(1) 仏(1) 我(仏)(1) 観音(3)・仏(4)	名号(1) 仁王経(1) 仏の御名(2) 法華経(2) 地藏の名号(2) 日摩尼の御手(1) 地藏の本誓(1) それ(経)(1)	今(1) 糸苦し気なるを(1) 極めて重きを(1)
八幡宮縁起 沙石集(日本古典文学大系)	観音(2)・仏(1) 仏(2) 仏(3) 菩薩(1)・尊(1) 人丸(1)	諸仏の法(2) 何事(2) 仏恩(1)・功德(1)	垂跡の重き事(1) 般若経(1) 一切の法(1) 観音の名号(1) 仏の相(1)	つれなき世(1)
				本意無き事(1) 逢ひみむ事(1)

(表11)

(参考) 親鸞聖人真蹟資料

資	料	信仰の 対象	仏教に 関する 事	仏教に 関係 しない 事
唯信抄 三帖和讃 尊号真像銘文(略本) 西方指南抄	一念多念文意 唯信抄文意専修寺正月十一日本 尊号真像銘文(広本) 顕浄土真実行文類	仏(6) 土の教主(1) 仏(3) 仏(1) 仏(7)	是(薬師には八菩薩の 引導あり)(1) 尊号(1) 名号(5)・道(1) 仏恩(1) 仏の色相光明(1) 報身(1) 本願(1) 名号(1)・功德(1) 諸仏の大法(3) 行(2)・功德(4) 念仏三昧(1) 仏の御名(1)	

ここで、三類の対象に基づいて、具体例を掲げ、更に個々の用例の「念ス」の意味を文脈に即して考えることにする。

△信仰の対象▽

- ①やがて、おしかよりて、仏をねんじ奉る(蜻蛉日記 215頁8行)
 ②つねにあまてる御神をねむじ申せ(更級日記 308頁12行)
 △仏教に関する事▽

③七歳より、としかげがつかうまつる本尊あらはれ給へと、観音の本誓をねんじたてまつるに(宇津保物語一 36頁16行)

△仏教に関係しない事▽

- ④としごろよみたてまつる仁王経を、「かならずくげんあらせ給へ」とねんじて(古本説話集 146頁7行)
 ⑤いとみじくかなしくおぼえさせ給フに、泪こぼれさせ給フヲねんじ△サセ給ヒ▽て(宇津保物語三 522頁11行)
 ⑥御心地いとくるしきをねんじつゝ、おぼしおこして、この御いそぎはてぬれば、三日すぐして(源氏物語 若菜上 1044頁11行)

⑦いとどもてしづめて、さばぐ御むねをねんじつゝ(増鏡 320頁)

15行)

△その他▽一ヲ格に下接しない例一

⑧うちとなる人の心ども、ものにおそはるゝやうにて、あひたゝかはむ心もなかりけり。かろうじておもひおこして弓矢をとりていむとすれども、手にちからなくなりて、なえかゝりたり。

なかに心さかしきもの、ねんじていむとすれども、ほかさまへいきければ(竹取物語 102頁6行)

⑨小弓いるにかたつ方ゝの人はぶきをしまぎらはしてさはぐに念じて音たかういてあてたるこそしたりがほなるけしきなれ

(枕草子 183段3行)

⑩阿弥陀佛と念じたてまつる人をば(栄華物語卷第三十 14丁30行)

⑪「佛々助々給へ」ト念シテ(今昔物語集 卷第十九 14話 93頁11行)

右の用例のうち、①「仏を念す」②「天照御神を念す」の「念す」の意味を文脈から判断すると、「祈る」という意味であると解される。また、③「観音の本誓を念す」④「仁王経を念す」の「念す」の意味も、「祈る」という意味であると解される。しかしながら、用例⑤⑥⑦の「泪こぼれさせ給ふを念す」「御心地いとくるしきを念す」「さはぐ御むねを念す」の「念す」は、「我慢して抑える」という意味であると解される。また、用例⑧⑨は、どちらも弓を射る場面での精神状態を述べた例であって、「(乱れた精神を)我慢して抑える」という意味であると解される。また、用例⑩⑪は、どちらも格助詞「ト」に下接する用例であって、「〜と唱えて祈る」と

(表12)

源氏	枕草	蜻蛉	宇津	大和	竹取
					思い起こす
					いといみじき心地しけり
					心うく・心をしづめて・いみじく悲しく
					心うさ(2)・そこはかたなくいと苦しうあはれにもの
					のおぼゆれば・おもひあなぐりて
					いと心もとなくおぼゆれど・思い起こして
					心をおこして(4)・心あはただしければ(4)・心強く(2)
					・なのめに思ひなりて・御心地かきくらしいみじく
					たへがたければ・思しわづらへど・悲しきおぼすに・
					たなく心地惑ひて・さうざうしく悲しとおぼすに・
					御心地もなかなか今ひときは乱れ増さるぬべければ
					・いみじう悲しきに・悲しういみじき事を思ひながら
					・ををしく・しづ心なく・苦しう思ひ乱れ心地い

いう意味であると解される。このように、和文資料・和漢混淆文資料に認められる「念す」の意味を文脈に即して解釈すると、「祈る」「我慢して抑える」という二つの意味に大別される。ここで注目すべきことは、⑤の用例に「いといみじくかなしくおぼえさせ給ふに」とあり、また、⑥に「御心地いとくるしきを」「おぼしおこして」、⑦に「もてしづめて」「さはぐ御むね」とあるように、「念す」が出現する文脈には、精神の状態を表現する語句が多く認められることである。このことから、「念す」が、「我慢して抑える」という意味として解される場合も、肉体的な苦痛を我慢するという意味ではなく、精神的に乱れた状態を我慢するという意味であると考えられる。ここで、「念す」が使用される場面に認められる、精神の状態を表現する語句をまとめると表12の如くなる。

△参考▽「念す」が使用される場面に認められる語句

と苦しきを・御心惑ふことにあたりてはえ静め給はぬわざなりけり・ちへにも思ひ重ねて・よるずに思ふ事多かれどいかで気色に出ださじ・思ひ静めむ方もなき心地して
心強く(2)・心いみじくあはれなれど・心を静めて・思ひ惑はるれどこよなうなやまし・おぼさるるもくるしきも
胸ふたがりながら(2)・くるしからむ(2)
いみじう心うけれど
肝心もくだけてふるはるれど

以上のことから、「念ス」の意義特徴の一つとして、「精神的に乱れた状態を我慢する」という要素が考えられる。そこで、和漢混濁文の中で「念ス」について説明が加えられた箇所を掲げて、より詳細に「念ス」の意義特徴について考えることとする。

- ①ヨク念ストマフスハフカク信スル也(尊号真像銘文 五13)
 - ②念ハオモヒサタメテトモカクモハタラカヌコ、ロナリ(唯信抄 文意 六13)
 - ③念ハ如来ノ御チカヒヲフタコ、ロナク信スルヲイフナリ(一念多念文意 82)
 - ④念ト云ハ憶持ノ義ナリコレ自心ノ本性ヲ憶念シテワスレサルナリ(真聞集 十四ウ4)
- 右に掲げた用例のうち、①「フカク信スル也」②「オモヒサタメテ」③「ハタラカヌコ、ロナ」④「フタコ、ロナク信スル」⑤「自心ノ本性ヲ憶念シテワスレサルナリ」という表現は、「念ス」の意義特徴

徴を考える上に於いて、注目すべきものである。以上のことから、「念ス」の意義特徴として、次の要素を設定することとする。

- (1) 精神的に乱れた状態を我慢する
- (2) 対象を深く信じる
- (3) 二心なく思い定める

右に掲げた意義特徴を基にして、「念ス」の本義を考えると、「精神を一心に集中して、動揺のない状態にする」となる。文脈から解される「祈る」「我慢して抑える」という意味は、それぞれ「対象に対して、精神を一心に集中して動揺のない状態で祈る」「乱れた心地を、精神を一心に集中して動揺のない状態にして我慢する」という意味を示していると考えられるのである。このことを図にまとめると、次のようになる。

「念ス」の本義	意義特徴	文脈から解される意味	用例番号
精神ヲ一心ニ集中シテ動揺ノ無イ状態ニスル	精神的に乱れた状態を我慢する 対象を深く信じる	祈る	④①②③ ⑩⑪
	二心なく思い定める	我慢する	⑧⑤⑥⑦ ⑨

②「オモフ」の意味・用法
先に述べた「念ス」の意味に対して、「オモフ」の意味は如何なる関係になるのであろうか。この項では、「オモフ」の意味・用法について考えることとする。そこでまず、同一の語が下接する複合動詞(念シ―・オモヒ―)を比較することにより、「念ス」と「オモフ」の意味的關係について考えることとする。

A 「念ス」が「祈る」の意味で使用される。

(1) 「念シアカス」と「オモヒアカス」

①よもすがら、ねんじあかし侍りつるしは、さりと、こよなく侍らんかし(狭衣物語 388頁12行) — 祈つて夜を明かす —

②中納言典侍、いとかかる御気色を心くるしう、おもひあかすに(狭衣物語 320頁16行) — 心配に思つて夜を明かす —

(2) 「念シイル」と「オモヒイル」

③ひたひに手をあて、ねんじ入りてをり(源氏物語 玉鬘 736頁13行) — 一心に祈る —

④は山のしげりまであながちにおもひ入らむも(源氏物語 東屋 1793頁1行) — 思ひつめる —

(3) 「念シマドフ」と「オモヒマドフ」

⑤御ずきやうやなにやと、うつし心なる人はすくなく、わむじまどふに(夜の寢覚 546頁14行) — 夢中に祈る —

⑥さは、あさましうむくつけしとおもひまどはれしは、この人こそ(夜の寢覚 79頁15行) — 思いあわてる —

(4) 「念シワタル」と「オモヒワタル」

⑦もえいづる春にあひたまはなむとねんじわたりつれど(源氏物語 蓬生 525頁14行) — 祈り続ける —

⑧いよ、心やすからずおもひわたらむもくるしかるらむ(源氏物語 常夏 833頁6行) — 思い続ける —

B 「念ス」が「我慢する」の意味で使用される

(5) 「念シアヘズ」と「オモヒアヘズ」

⑨ねんじあへずうちなくけはひあはれなり(源氏物語 薄雲 607頁11行) — 我慢しきれない —

⑩た、今、かくおもひあへずはづかしき事どもに乱れおもふべくは(源氏物語 総角 1622頁2行) — 思いがけない —

(6) 「念シカヘス」と「オモヒカヘス」

⑪たへがたきを心つよくねんじかへさせたまふ(源氏物語 桐壺 25頁1行) — 我慢し続ける —

⑫人、もあまたみつきいひちらさんこと、おもひかへし給ふものから(源氏物語 常夏 845頁7行) — 考え直す —

(7) 「念シスグス」と「オモヒスグス」

⑬人の言ひつたふべきころほひをだにおもひのどめてこそはとねんじすぐし給ひつゝ(源氏物語 幻 1480頁1行) — 我慢して日々を過ごす —

⑭なのためにおもひすぐさむことの(源氏物語 常夏 833頁7行) — 考えながら日々を過ごす —

(8) 「念シハツ」と「オモヒハツ」

⑮我らもえこそねんじはつまじけり(源氏物語 蓬生 535頁1行) — 我慢し通す —

⑯猶又このためにと思はてむにはかぎりぞ有るや(源氏物語 若菜上 1039頁6行) — 決断する —

右に示したように、複合動詞の意味を比較すると、(1)～(8)の全ての組み合せて、意味が異なっている。このことは、「念ス」と「オモフ」の意味が異なっていることを端的に示している。

さて、ここで「オモフ」の意味について考えることとする。今、試みに源氏物語に於ける「オモフ」の意味を文脈に即して解釈し、分類すると次のようになる。

a 思考する（想像する・心配する・感謝する）

①むなしき御かうをみる／＼猶おはする物とおもふがいとかなひな
ければ（源氏物語 桐壺 10頁5行）―考える―

②かくても、のこりのよはひなくは行ひの心ざしもかなふまじけ
れど、まづ、かりにてもどめをきて念仏をだにと思ひ侍る
（同右 若菜上 104頁13行）―考える―

③おもはずなる事いでくる物なめるを（同右 若菜上 105頁8
行）―想像する―

④としごろ、さもやあらむと思しことどもも（同右 若菜上 106頁
頁5行）―心配する―

⑤いよく六条院の御ことを年月にそへて、かぎりなく思ひきこ
えたまへり（同右 若菜下 113頁8行）―感謝する―

b（人を）慕う
⑥まずは、おもふ人にさま／＼おくれ（同右 若菜下 116頁2
行）―慕う―

⑦猶思ふさまことなる心のほどをみはて給へ（同右 若菜下 116頁
頁7行）―慕う―

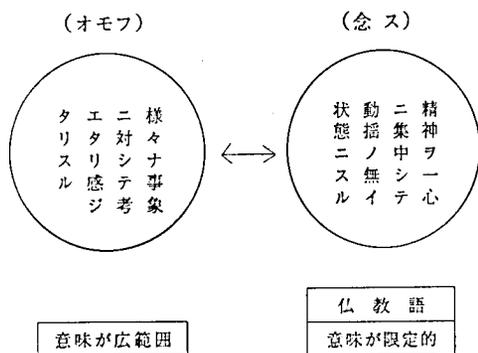
c 願う
⑧佛神にも思ふ事申すは、つみあるわざかは（同右 若菜下 117頁
頁9行）―願う―

d 感じる
⑨あまりゆへよし心ばせうちそへたらむをばよろこびにおもひ
（同右 帚木 41頁4行）

このように、「オモフ」は、何らかの思考活動に関わる場面で使

用され、その場面に応じて種々の意味を示す。従って、「オモフ」の意味は、「様々な事象に対して考えたり感じたりする」であると考えられる。また、「オモフ」には、「祈る」「我慢する」の意味で使用された例が認められないことも、「オモフ」と「念ス」の意味が異なっていると考えられる根拠となる。

「オモフ」の本義 様々な事象ニ対 シテ考エタリ感 ジタリスル	文脈から解される意味 思考する（想像する・心配する・感謝する） （人を）慕う 願う 感じる
---	---



(2) 「オモフ」は思考活動
ここで、「念ス」と「オモフ」の意味的關係についてまとめると次のようになる。
①「念ス」の本義は、「精神ヲ一心ニ集中シテ動搖ノ無イ状態ニスル」であり、「オモフ」の本義は、「様々な事象ニ対シテ考エタリ感じタリスル」である。従って、「念ス」と「オモフ」の本義は異なる。

に關わる場面で使用され、種々の意味を示す。これに対して、「念ス」は仏教語であると考えられ、「オモフ」と比べると、限定された場面で使用される。

三、訓点資料と和文・和漢混淆文資料との比較

これまで、訓点資料と和文資料・和漢混淆文資料に於ける「念ス」「オモフ」の意味・用法について述べてきた。そこで、この項では、訓点資料に於ける意味・用法と和文資料・和漢混淆文資料に於ける意味・用法とを総合的に述べることにする。

(1) 訓点資料では、「念」字を動詞として読む場合、文脈上「精神を一心に集中して動搖の無い状態にする」の意味であると加点が考えたり感じたりする」と判断した場合には「オモフ」と読んだと考えられる。特に、仏等の信仰の対象に続く場合には「念ス」と読むという判断が存したものと考えられる。つまり、訓読に於いては、和文資料・和漢混淆文資料に認められる「念ス」「オモフ」の意味・用法と合致していると考えられるのである。また、「精神ヲ一心ニ集中シテ動搖ノ無い状態ニスル」という「念ス」の本義は、「念ス」が訓点資料に於いて仏典及び仏教関係資料のみにしか認められないことから、仏教思想と関わっていると考えられる。更にまた、仏典及び仏教関係資料に於いて、「仏教に關する事」を対象にとる場合には、意味に拠る読み分けの他に、加點時期の違いや訓読の系統の違いに拠って、読み方が異なるという訓読文の特徴も存している。

(2) 和文資料・和漢混淆文資料では、「念ス」に、「我慢する」という意味と解される例が存する。この「我慢する」という意味で解される「念ス」は、対象として「仏教に關係しない事」をとるという特徴が存し、訓点資料では認められないものである。しかしながら、「念ス」の本義を「精神ヲ一心ニ集中シテ動搖ノ無い状態ニスル」と考えて、文脈上「我慢する」と解した意味を「精神を一心に集中して動搖の無い状態に抑え我慢する」と把握するならば、本義から派生した意味であると解せられる。

むすび

以上、小論の筆者は、従来の漢語サ変動詞の意味・用法に関する研究が、偏った文章ジャンルの文献のみを研究対象として取り上げたものであることを問題点として考えて、平安・鎌倉時代の訓点資料・和文資料・和漢混淆文資料を対象として、「念ス」と「オモフ」の意味・用法を総合的に解明しようとしてきた。訓点資料を研究対象として加えたことにより、漢語サ変動詞の意味・用法が一層明らかになったと考えている。その結論は、先に述べた如くであるが、尚、次の如き問題点が残されている。

(1) 訓点資料に於いて、時代差や訓読の系統に拠って読み方が異なる場合が存することを、他の語に対する検討を加えて、具体的に述べる必要が存する。

(2) 文脈上、「我慢する」という意味で解される「念ス」の例は、今回の調査では、和文資料・和漢混淆文資料にのみ認められなかった。しかし、この事については、今後調査を密にし、より確実

にしていかなければならないと考える。特に、中国文献に於いて、「念」字を「我慢する」という意味で使用した例が認められるか否かについて調査する必要がある。

今後は、以上の課題を解明することに努めるとともに、他の漢語サ変動詞についても検討を加えていきたいと考える。

△注▽

(1) 佐藤武義「中古の物語における漢語サ変動詞」『国語学研究』

3 昭38)等

(2) 森下喜一「△ある▽と△具す▽について」『野州国文学』10

昭47・9)

岩下裕一「△念ず▽の多義性について」『国学院雑誌』78—11

昭53・11)

佐々木峻・牧野泰子「院政鎌倉時代の六文獻における漢語サ変動詞語彙の比較研究——特有語彙と共有語彙の観点から——」『鎌倉時代語研究』第一輯 昭和53・3)

佐々木峻「漢語動詞と和語動詞との語義上の対応・相関関係——『三教指帰注』『光言句義釈聽集記』『法華百座聞書抄』を資料として——」『鎌倉時代語研究』第二輯 昭54・3)・「漢語動詞

と和語動詞との語義上の対応・相関関係統考——三、四の語群について」『鎌倉時代語研究』第三輯 昭55・3)

岩下裕一「△信ず▽の展開——語義から見て」『昭和学院短大紀要』16 昭55・3)

大野透「△愛▽△愛す▽に就て」『国語学』126集 昭56・9)

藤原浩史「漢語サ変動詞△具す▽の和化過程」『国語学研究』27

昭62・12)・「漢語サ変動詞△怨ず▽の意味と表現価値」『国語学

研究』28 昭63・12)等

(3) 築島裕『平安時代の漢文訓讀語につきての研究』(昭38 東京大學出版會)・「興福寺大本慈恩寺三藏法師傳古點の國語學的研究篇」(昭42 東京大學出版會)等

(4) 小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』(昭42 東京大學出版會)等

(5) 國廣哲彌著「意味論の方法」(昭和57年 大修館書店)には、「主語、目的語にそれぞれ認められた特徴は動詞の意義特徴の一部を構成し得ることになる」(24頁)とある。ここでいう対象とは、この目的語に相当するものである。

(6) 同右の著書、44頁に、「意義素はそれが用いられる具体的な場面・文脈からは原則として独立しており、それが場面・文脈の影響を受けて表面的にはいろいろと変容した姿を見せる、というふうに考えるので、意義素の分析に当たってはそれらの影響を取り除くよう努力をしなければならぬ。(中略)場面・文脈の影響を取り除いたあとに、全用法を通じて認められる一定の意味が残るといふことが満たされていなければならない」とある。

(7) 説文解字には、「念」に対して「常思也」という説明が加えられている。

○資料一覽

・唐招提寺本金光明最勝王經——「訓点語と訓点資料」第一輯 稲垣瑞穂・山田本妙法蓮華經——(同)第七輯 大坪併治・聖語藏願經四分律——(同)第三十輯 鈴木一雄・西大寺本金光明最勝王經——「西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究」春日政治著・東大寺図書館藏金光明最勝王經註釈——「訓点語と訓点資料」第

二、三、八 鈴木一雄 東大寺図書館蔵成実論(卷十三)——(同)
 第二、三輯 稲垣瑞穂(二十一)——(同) 第八 鈴木一雄・正倉
 院本地蔵十輪經(卷五、七)——勉誠社 中田祝夫(卷一、二、
 四、八、九、十)——「古点本の国語学的研究」中田祝夫著・石山
 寺蔵佛説太子須陀拏經——「訓点語と訓点資料」第七十一、七十二
 輯合併号 小林芳規 松本光隆 鈴木恵・石山寺蔵沙彌十戒威儀
 經——「角筆文獻の国語学的研究」 小林芳規 汲古書院・東大寺
 図書館蔵百法顯幽抄——「訓点語と訓点資料」第五十八 稲垣瑞穂
 ・法華經文讀淳祐古点「訓点資料の研究」 大坪併治・天理圖書
 館蔵南海寄歸内法傳——(同)・高野山竜光院蔵妙法蓮華經——(同)
 ・法華義疏長保四年点——(同)・東寺蔵不動儀軌——「訓点語と訓点
 資料」第六十五輯 月本雅幸・地藏十輪經康平三年点——勉誠社
 中田祝夫・大東急記念文庫蔵大日經義積——「訓点語と訓点資料」
 第十六、十七、二十三、二十七、二十八 松本健二・高山寺蔵大毗
 盧遮那成佛經疏——「高山寺古訓点資料」高山寺古典籍文書総合調
 査団編東京大学出版会・立本寺本妙法蓮華經——「訓点語と訓点資
 料」別冊第四 門前正彦・興福寺蔵大慈恩寺三蔵法師傳——「興
 福寺蔵大慈恩寺三蔵法師傳古点の国語学的研究」 築島裕・広
 島大学蔵八字文殊儀軌——「訓点語と訓点資料」卷三十九 井上親
 雄・大唐西域記長寛元年点——「古点本の国語学的研究」 中田祝
 夫著・西教寺本秘蔵宝鑰——「訓点語と訓点資料」卷四十二、四十
 三、四十六輯 曾田文雄 岸田民子・浄土講註——「親鸞聖人真蹟集
 成」・神田本白氏文集——「神田本白氏文集の研究」 太田次男
 小林芳規・金沢文庫蔵白氏文集——川瀬一馬監修 勉誠社・群書治
 要 卷一、十——「古典研究会叢書」 汲古書院・高山寺本論語——

「高山寺古訓点資料」高山寺古典籍文書総合調査団編東京大学出版会
 ・書陵部蔵文選——写真版
 竹取物語、伊勢物語、大和物語、落窪物語、宇津保物語、和泉式部
 物語、蜻蛉日記、紫式部日記、夜の寝覚、浜松中納言物語、狄衣物
 語、更級日記、堤中納言物語——「日本古典文学大系」・枕草子——「校
 本枕草子」・源氏物語——「源氏物語大成」・榮華物語——「梅沢本榮華
 物語本文と索引」 高知大学人文学部国語史研究会編・とりかへば
 や物語——「とりかへばや物語 本文と索引」 鈴木弘道編著 大学
 堂書店・石清水物語、いはでしのぶ、風につれなき物語、風に紅葉、
 あききり、あさちが露、あまのかるも、在明の別れ、たまきはる——
 「鎌倉時代物語集成」・竹むきが記——「うたゝね 竹むきが記」 風
 間書房・今昔物語集、増鏡、方丈記、宇治拾遺物語、沙石集——「日本
 古典文学大系」・名古屋市博物館蔵三宝絵詞——名古屋博物館発行
 ・観智院本三宝絵詞——勉誠社・八幡宮巡拝記——「中世神仏説話」
 古典文庫・打聞集——「打聞集の研究と総索引」 東辻保和 清文堂
 出版・十訓抄——「十訓抄 本文と索引」 泉基博編・高野山西南院
 蔵往生要集——和泉書院・最明寺本宝物集——「中世古写本三種」 古
 典文庫・高山寺明恵上人行状——「明恵上人資料 第一」 高山寺古典
 籍文書総合調査団編 東京大学出版会・足利本仮名書き法華經——中
 田祝夫編 勉誠社・今鏡——「本文及び総索引」 榊原邦彦 藤掛和
 美 塚原清 笠間書院・閑居友——「本文及び総索引」 峰岸明 王
 朝文学研究会編・発心集——「発心集 本文 自立語索引」 清文堂出
 版・古本説話集——「古本説話集総索引」 山内洋一郎編・唯信抄、
 三帖和讃、尊号真像銘文、西方指南抄、一念多念文意、顕浄土真実
 行文類——「親鸞聖人真蹟集成」

(付記)

本稿は、平成二年十一月十日に開催された国語学会中国四国支部第三十五回大会での発表に基づいたものである。その席上、関一雄先生を始め、多くの諸先生方から貴重な御意見を賜わった。記して、深謝申し上げます。また、本稿を成すに当たり御指導を賜わった小林芳規先生、室山敏昭先生に厚く御礼申し上げます。

——広島大学大学院博士課程後期在学——